

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

(第2期第24号 - 通巻第36号)

発行：2018年5月7日

投稿論文2

永谷 清

(信州大名誉教授 nagatani.kiyoshi@nifty.com)

価値形態論の革新

『宇野理論を現代にどう活かすか Working Paper Series』

2-24-2

http://www.unotheory.org/news_II_24

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

事務局：東京都練馬区豊玉上1-26-1 武蔵大学 横川信治

電話：03-5984-3764 Fax：03-3991-1198

E-mail: contact@unotheory.org

ホームページ <http://www.unotheory.org>

価値形態論の革新

永谷 清 (信州大名誉教授)

要旨

私は価値形態論は、『資本論』を貫く基本論理と考えている。しかしマルクスはそれを未完成のまま残したために、150年間、世界的に価値形態論は論じられてきたが、混迷に陥り、『資本論』以上の発展が見られたかどうか、疑わしい。その混迷の中での唯一の光明は、1950年に公刊した、宇野弘蔵の、相対的価値形態はリンネル所有者を想定しないと理解できない、また価値形態論は実体規定なしに展開せねばならない、という問題提起だった。この新しい視角は、その後、原理論、段階論などの方法論を生み出してゆくことになった。

しかし私は宇野の価値形態論にも今も未解決の問題が残されていると考えている。単純な価値形態論はもとより、拡大価値形態や一般的価値形態についても、さらに一般的価値形態から如何に貨幣形態を展開するか、についても宇野は問題を残している。宇野派はそれを問題にしながらかえって後退さえ起こっているのではないか。あらためて『資本論』にもどって価値形態論を問題にしてみたい。

交換価値は価値の表現形態であり、両者は異なる概念である。だが古典派では両者は同義語のように使われた。この交換価値の特徴は、二商品が交換される、また他のどの商品とも交換される、という想定である。この交換価値からは価値形態の発想は生まれなかった。マルクスの価値形態の発見は交換価値論への批判を契機になされた。

しかしマルクスの単純、拡大、一般の価値形態論には、まだ交換価値概念の影響が残り、それぞれ大きな不備を残している。そうってしまったのは、マルクスが最初から価値を抽象労働、ないし社会的必要労働と規定してしまったからである。宇野の実体規定を捨象した価値形態論は、この難点の突破口になったが、まだ未解決部分を残している。宇野派の価値形態論もそれを問題にしえず、現在停滞している。本稿では、単純な価値形態と貨幣形態の関係に焦点を当て、その克服を試みる。最後には、経済学では、そもそも価値表現とはなにか、という基礎問題が解けていないのではないか、を論じる。

キーワード

交換価値、古典派価値論、ベイリー、価値形態、貨幣形態 宇野・久留間論争

目次

I

- 1 価値にとって交換価値の必然性
- 2 交換価値と単純な価値形態
- 3 マルクスの単純な価値形態の問題点

4 価値表現の必然性のマルクスによる解決法

II

- 1 価値形態論と交換過程論の相違と関連
- 2 新地平を拓いた宇野の価値形態論
- 3 価値形態論と物神性論との関連

III

- 1 価値形態論と要因論との関係
- 2 価値にとっての価値形態の必然性
- 3 単純な価値形態と貨幣形態

結語

価値表現とは何か

『資本論』が刊行されてから、150年たった。この間、本書をめぐって世界的に多くの研究がなされてきたが、そのなかで、価値形態論、労働価値論または価値法則論、生産価格あるいは転形問題は、『資本論』研究のなかの三大論争点をなしてきたと言えるだろう。そして、それぞれが別個に論じられる場合が少なくなかった。だが、それらが資本主義の理論体系の一環をなす以上、独立した問題ではありえない。私は、生産価格は価値法則が明確にならないと解明できないし、価値法則は価値形態論が明確にならないと、解明できない、と考えている。

生産価格論争は、価値方程式と生産価格方程式の整合という数学問題へと解消され、「転形問題」として世界的に流行したが、『資本論』の内容を発展させたかどうか疑わしい。それは価値を労働量として数値化する仮説自身が間違っており、迷路にはまることになった。

マルクスは商品の価値は対象化した労働であるとし、商品論、貨幣論を展開している。しかし生産物商品の価値は、労働力商品が登場して展開される資本の生産過程において初めて、労働による実体規定がなされうるという批判が宇野弘蔵によって提起され、それをめぐって論争がなされた。しかし価値の実体規定が商品論では説けないと主張した宇野説を支持する人々の中にあっても、いまだに如何に価値法則を資本の生産過程で論証するか、については見解の一致に至っていない。

価値形態論争は、戦後日本でとくに激しかった。戦後すぐに再開された『資本論』研究会において交わされた宇野弘蔵と久留間鮫造との論争が発端となった。

商品価値の表現としての価値形態論は、商品所有者を捨象した「商品と商品の関係」であると久留間は主張した。宇野は価値表現する側（左辺）に商品所有者を想定しないと価値形態論は成立しえないと主張した。両者の対立は解決することなく、この研究会は解消してしまった。

その後宇野は新たな自己の価値形態論を発展させ、さらに商品論、貨幣論、

「貨幣の資本への転化」論を、労働という実体規定を抜いた商品・貨幣・資本の形態規定として再編成した。価値の労働による実体規定は、その後の資本の生産過程で展開した。この新たな方法は、さらに『資本論』体系の再構成、経済学原理論にまで至った。第1巻「資本の生産過程」、第2巻「資本の流通過程」、第3巻「資本家的生産の総過程」というマルクスの体系に対して、宇野は第1編「流通形態論」、第2編「生産論」、第3編「分配論」とした。無論この改編が功績なのか否かは今後も検討されねばならない。だが価値形態論という一見ささいな問題が大きな威力を蔵していることを、この例は示唆しているといつてよいだろう。

価値形態論争は現在も宇野派と久留間派とに分かれ、宇野の方法を支持する宇野派とそれを批判する反宇野派の対立は今も続いている。この対立の出発地点の一つを価値形態論がなしている。私は基本的に宇野の方法論を支持しているが、価値形態論についても価値法則論についても、宇野説にはまだ解決できていない部分や間違った部分があると考えている。これまでそれらを問題とし、その解決・発展を試みてきた。最近の著書『市場経済という妖怪』でもそれらの問題点を扱っている。それらを踏まえたいうえで、さらに新たな視点を提示してみたい。

I

1 価値にとって交換価値の必然性

古典経済学では商品の価値は交換価値と呼ばれることが多かった。それは商品には人間に役立つ物として使用価値をもつが、それだけでなく他の商品とも交換できるという役立ちももっている、と考えたからである。その交換への役立ちの方を、使用価値 (use in value) に対して、交換価値 (value in exchange) と呼んだ。そして商品は、使用価値と交換価値をもつ、と広く言われた。しかし他方では使用価値要因と対比されるもう一つの要因は価値と呼ばれていたから、価値と交換価値という語はしばしば同義語のように使われていた。スミスやリカードだけでなく、マルクスでさえ『資本論』で価値形態論を展開するまでは、価値と同じ意味で交換価値という語をしばしば使っていた。

使用価値は商品体そのものであるが、交換価値はそれと交換される他の商品との交換比率である。古典派は商品には内在的に価値があるから、二つの交換される商品の間で等価値関係として交換価値が成立すると考えた。これに対して、価値なるものはもともと2商品の交換関係でしかなく、商品に内在する価値なるものは存在しないという説が登場した。その代表者は、リカードの投下労働価値説を否定したベイリーだった。リカードの労働価値説を支持していたマルクスは、ベイリー説を無視していたが、価値形態論を発見することによって、ベイリーがリカード価値論の欠点をついていることに気づいたように見える。それは価値形態論 (『資本論』第二版、現行版、以下特に記さないときはこの版を指す) の「相対的価値形態の内実」の所の註17の次の文で推察できる。

「ベイリーのような価値形態の分析に携わってきた少数の経済学者が少しも成果をあげることができなかったのは、一つには彼らが価値と価値形態とを混同しているから」（『資本論』第1巻、マルクス・エンゲルス全集23巻I a、67頁、以下本書は全集と略記）。

ベイリーは内在的価値を否定し、価値形態という語も使っていないし、論じてもない。それなのにマルクスなぜ「価値形態の分析に携わった少数の経済学者」と一定の評価をしたのだろうか。それはリカードのいうように商品は労働の体化した価値をもっているとしても、そのまま価値として現れることはなく、交換価値としてしか現れえない必然性にマルクスが気づいたからである。生産物は本来労働で得られた価値をもっていると考えた古典派にとっては、交換価値が交換比率であることは自明であり、価値がなぜ交換価値としてしか現れないのか、は問題として意識されない。それは古典派には商品にとって貨幣の必然性が認識されなかったのに通じている。貨幣は商品交換のための便宜的手段でしかないことになる。

ベイリー説は、交換価値こそ価値であり、商品には内在的価値はない、という考えである。リカードと同じく価値の実体が労働であると考えたマルクスがベイリーを真っ向から批判している様子は、『剰余価値説史』のベイリーの項の所で示されている。しかしその後の研究過程で、ベイリー説は間違いであっても、リカードには欠けている価値にとって交換価値の必然性の問題を衝いているのに気づいたのではないか。『資本論』では、上記のように、ベイリーを一面で評価し、他面では「価値と価値形態を混同した」と批判しているのはそのためであろう。

この必然性に気づくことにより、マルクスには価値と価値の現象形態としての交換価値という区別がはっきりすることになった。もはや価値と交換価値を同義語として使うことは、『資本論』ではなくなった。そして価値の現象形態としての交換価値を解明するものとして、価値形態論が登場することになった。商品論第三節が「価値形態または交換価値」と題されたのは、そのためである。

2 交換価値と単純な価値形態

交換価値という概念にはもう一つ問題がある。交換価値としての二商品の交換関係は交換された（あるいは必ず交換される）関係か、交換される前の価値表現の関係なのか、不分明である。どちらも含む語である。古典派のように、商品は本来他のどの商品とも交換できると考えられている限り、この区別は意識されない。また商品交換にとっての貨幣の必然性も見失われることになる。

マルクスは商品が直接交換されれば、それは物々交換であり、商品交換をなさないという認識をもっていた。二商品の交換関係とは、交換された関係ではなく、交換前の関係であるという認識が発生する。価値表現と価値実現の区別である。価値形態論の発生が、価値表現論を強化してゆくことになるのは、このためである。二商品による単純な価値表現から完成した貨幣による価値表現（価格表示）までの展開が論理的展開であることを、マルクスは価値形態論の

序文で次のように説明している。

「諸商品は、それらの使用価値の雑多な現物形態とは著しい対照をなしている一つの共通な価値形態—貨幣形態をもっているということだけは誰でも・・・知っていることである。しかしここでなさねばならないことは、ブルジョア経済学によってはただ試みられたことさえないこと、すなわちこの貨幣形態の生成を示すことであり、したがって諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展をその単純な最も目立たない姿から光まばゆい貨幣形態に至るまで追跡することである」(全集、65頁)。

マルクスの言う貨幣形態とは貨幣である金商品での価値表現のことであり、商品が売れる前の店頭での価格表示を意味している。商品は現実には貨幣によって交換され、商品価値は実現する。交換される前にはまだ商品に現実に価値があるかどうかは誰にもわからない。実現前の交換希望として価値表現がある。

基礎的な単純な価値表現をマルクスは次のように記している。

麻布商品 20ヤール = 上着商品 1着

そしてこの関係を麻布 20ヤールは上着 1着に値する、と述べる。そして

「この価値形態の秘密はこの単純な価値形態のうちにひそんでいる。それゆえこの価値形態の分析には固有な困難がある」(全集、65頁)。

と注意している。

マルクスは2商品の交換関係としての一つの交換価値の中に二つの異なる形態が含まれていることを発見する。他商品で相対的に自己の価値を表現する商品とその価値表現に材料として利用される商品とを区別し、前者(麻布 20ヤール)を相対的価値形態、後者(上着 1着)を等価形態と呼んだ。麻布 20ヤールは価値を表現し、後者は自分からは何もせず受動的である。前者は自己の価値存在を他商品で示しているが、後者も前者に等価物として認められることにより、価値存在を示す、と同時に麻布商品 20ヤールへ直接的交換可能性をもつ、ことをマルクスは発見した。

初版付録では、第二版では消えている「相対的価値と等価物とはただ価値の諸形態である」(『資本論』初版、大月文庫、132頁)とある。第二版では、相対的価値形態と等価形態に統一されたが、価値形態が相対的の方にしかついていないために、価値形態とは相対的価値形態のことでしかない、かのように誤解されるおそれがある。『資本論』商品論は「三、等価形態」の節で次のように指摘している。

一商品 A(麻布)はその価値を異種の一商品 B(上着)の使用価値で表すことによって商品 B そのものに、一つの独特な価値形態、等価物という価値形態を押しつける」(全集、75頁)。

私はマルクスの言う等価形態とは、正確には等価の価値形態のことであると

考えている。

「商品はただそれが二重形態、すなわち現物形態 **Naturalform** と価値形態とをもつかぎりでのみ、商品として現れるのであり、商品という形態をもつのである」(同、64頁)。

商品が価値と使用価値という二重の要因をもっていたように、現実には商品は価値形態と使用価値形態という二重の形態をもって現れる。それが商品形態である、という。麻布商品20ヤールは上着1着で相対的に価値表現することによって自己の価値存在を示すと同時に、麻布商品20ヤールが具体的に「他人のための使用価値」となり、麻布商品20ヤールが商品であることを現実示している。他方、上着1着はこの関係のなかでやはり「他人のための使用価値」となり、また麻布商品20ヤールへの直接的交換可能性をもつことによって価値存在を示す。これにより、現実には商品の姿をとることになる。だから価値に価値形態があるだけでなく、使用価値や商品についても相対的形態と等価形態の二極があることに注意しなければならない。

ここで気になるのは、マルクスは使用価値の形態のことを、一貫して「現物形態」**Naturalform** (自然形態とも訳される) と呼んでいることだ。上の文でも「現物形態」に価値形態が加わったものが、商品形態と言っている。初版や付録では使用価値の形態という語が見られるが、第二版では **Naturalform** が前面に出ている。使用価値はたんなる物ではなくて、人に有用な物であるが、それだけでは商品の使用価値をなすわけではない。所有者には不用で、交換をとおして不特的多数の他人に有用となる使用価値のことである。

この商品の使用価値形態を「現物形態」に固定してしまったのは、これから具体的にみてゆくと、『資本論』の欠点の一つをなしている。だから相対的価値形態、相対的使用価値形態、相対的商品形態の三つがあるように、等価形態にも、等価の価値形態、等価の使用価値形態、等価の商品形態の三つがあり、それぞれが対極的な関係にあることになる。この点は『資本論』も宇野弘蔵『経済原論』(著作集第1巻、以下、宇野原論と略記)も明確にしていけないが、価値形態論の意義を把握するのに欠かせない視点である。

麻布商品20ヤール=上着商品1着が交換価値として見られた場合には、両者が交換される関係であるから、麻布20ヤールが上着1着で価値表現しているし、上着1着も麻布20ヤールで価値表現していることになる。 $A=B$ なら $B=A$ ということになる。しかしマルクスはこれを拒否し、あくまでも左辺の商品の価値表現内において、左辺と右辺が相対的価値形態と等価形態という対照的な極が成立していると考えた。これによって等価形態の商品の使用価値が、左辺の商品に対して「直接的交換可能性」をもつ、という画期的な発見ができた。等価形態の商品がもつこの「直接的交換可能性」こそは、金商品が貨幣として全商品に対してもつ絶対的交換力という謎を解明するカギであるからである。

上着もまた等価形態を、直接的交換可能性という属性を、重さがあるとか保温に役立つとかいう属性と同様に、生まれながらにもっているように見える。それだからこそ等価形態の不可解さが感じられるのであるが、この不可解さは、この形態が完成されて貨幣となって経済学者の前に現れたとき、はじめて彼のブルジョア的に粗雑な目を驚かせるのである（同、78頁）。

マルクスも注意しているが単純な等価形態の商品では、あくまでも麻布20ヤールが上着1着で価値表現しているかぎり、上着1着は麻布20ヤールに対して交換力を持ちうるにすぎないから、上着という物体そのものが持っているのではない。その交換力は神秘性をまだもちえない。

貨幣形態をその完成した姿とする価値形態は、非常に無内容で簡単である。それにも関わらず、人間精神は2千年以上も前から空しく解明に努めてきた」（第1版序文）。

とマルクスが自信をもって宣言したのは、等価商品の価値形態を発見することによって貨幣形態の謎の解明に遂に成功したという自信があったからであろう。だが私の価値形態論の理解からすると、マルクスによる貨幣の謎の解明はまだ道半ばである。この点はすでに拙書『市場経済という妖怪』でも指摘している（86頁）が、後に貨幣形態を取り扱うときに詳論する。

3 マルクスの単純な価値形態論の問題点

以上見てきたように、マルクスの価値形態論は常識的な古典派の交換価値論の批判によって形成されたものであった。しかしマルクスの単純な価値形態論には交換価値を完全に批判できていない部分がある。いくつか残され、論理的に不整合をもたらしている。

第一節要因論において、小麦と鉄という二商品の交換関係から両使用価値の捨象を導き、価値を抽象する方法は、商品が直接交換できると想定する交換価値論そのものである。マルクスは、交換価値は価値の必然的な現象形態であるから、商品論第一節では交換価値から価値を抽象する試みをしている。しかしその抽象が成り立ちうるのは、それぞれの商品が実際に交換された場合だけである。そうするとそれらはもはや商品ではないことになる。マルクスの抽象の方法は、いずれも優れた価値形態論に反したものになっている。

マルクスは、商品交換は両使用価値の捨象であると同時に、両使用価値を作る有用労働の捨象でもあるとし、これから価値は人間的抽象労働である、という価値の実体規定をおこなっている。しかし商品価値の実体規定は、労働力の商品化にもとづき機械制工業によって確立する資本の生産過程において初めて成立する。労働力商品も資本もまだ論理的に措定されていない商品論において言及することは無理である。商品論では価値も価値形態も労働に一切触れないで展開せねばならないし、また展開しうるという試みを行ったのが宇野原論である。

経済学史的には、価値の実体が労働であることを、価値法則の展開として資本の生産過程で明らかにしたのは『資本論』第1巻の功績といえる。第1巻の表題が資本の生産過程とされたのも、マルクスがそれを自覚していたことを示している。それなのになぜまだ資本の生産過程が措定されていない商品論で価値の実体規定をしたのだろうか。マルクスも無理を感じていながら、理論の対象が資本家的生産様式であり、その中から商品を資本の生産物として抽象して論じるなら、商品価値の実体規定をしても論じることが可能である、と考えたのではないだろうか。実際、労働二重性論で分業に触れるとき特にはっきり出てくるが、事実上資本の生産過程を想定して論じている箇所がいくつか商品論にはある。第一巻冒頭の「資本家的生産様式の支配的な社会の富」としての商品規定もそれを示している。

だから商品論をマルクスが労働価値説をもって展開しているからといって、商品所有者を商品生産者とし、商品論を小商品生産者（自分の生産手段と労働力をもって商品生産する者）からなる一社会（単純商品生産社会）と解釈するのは間違っている。エンゲルスに代表されるこの説は永く『資本論』研究に混乱を招いたが、今では命脈を絶たれたといつてよい。しかしマルクスが商品論と貨幣論を価値実体としての労働と常に関連させて展開させていることから必然的に起こった混乱であり、たんに解釈の誤りでは済ませる問題ではない。

宇野弘蔵は、この問題を商品論、貨幣論を労働実体の捨象された形態論とし、価値の実体規定と価値法則は資本の生産過程で展開するという新たな方法を提示した。私はこの方法を支持しているが、宇野においても宇野派においてもまだ解決されていない問題が多く残されていると考えている。本稿では価値形態論が対象である。価値の実体規定の問題はもう一つの重要な問題だが、他稿に譲るしかない。¹

本題にもどる。マルクスは単純な価値形態について、左辺と右辺は交換できない。両者を交換し上着1着＝麻布20ヤールにすると、別の価値表現式（上着1着が相対的価値形態、麻布20ヤールが等価形態）になると言っている。交換価値論なら交換しても同じ意味であるから交換可能である。マルクスが交換価値論を批判しているのは明らかである。だが同時に「逆関係を含んでいる」（全集、66頁）と述べている。しかしこれは $A=B$ なら $B=A$ である交換価値の考えである。

マルクスがそう考えるのは、すでに商品の価値を対象化労働と規定していたからだろう。またこの考えは、拡大された価値形態あるいは「全体的価値形態」を「逆転」すれば一般的価値形態が成立する、とするマルクスの方法の伏線になっているとも見られる。この論理は価値形態論に反している。

さらに問題がある。マルクスは等価形態の商品を他の商品であればどんな種

¹ 私の価値の実体規定や価値法則にたいする見解については、拙著『価値論の新地平』と Nagatani, 'Capitalist Exploitation and the Law of Value' を参照。私の生産価格論については『資本主義とは何か一原理論』を参照。

類の商品でもよいとしている。それは、商品はどの他の商品とも交換できるとする交換価値の考え方である。商品には一面ではその性格をもちながら、現実にはそのような交換はできないからこそ、貨幣の必然性が出てくる。その一面だけで商品を捉える点に交換価値論の特徴がある。

マルクスの単純な価値形態の二商品の関係は、左辺商品の価値の右辺商品の使用価値による価値表現であることは明確にされている。しかしその二商品が交換される前の関係なのか、交換された（あるいは必ず交換される）関係なのか、不明瞭な箇所がある。拡大された価値形態論、一般的価値形態論においても商品が交換されると想定している所が散見する。完成した価値表現である貨幣商品での価値表現(価格表示)を展開する『資本論』の価値尺度論（これは本来商品論の貨幣形態論でなければならない）においては、マルクスは次のように価値表現が交換前の相対的価値形態の商品の主観的な関係である、ことを指摘している。

商品価値の金による価値表現は観念的なものだから、この機能のためにも、ただ想像されただけの、観念的な金を用いることができる。商品の番人が誰も知っているように、彼が自分の商品の価値に価格という形態、または想像された金形態を与えても、また彼は何百万の商品価値を金で評価するためにも、現実の金は一片も必要としないのである(全集、127頁)。

単純な価値形態は完成した価値表現である貨幣形態からの抽象規定であるというのがマルクスの立論であった。そうであれば単純な価値形態も、交換前の商品所有者の主観的な関係であることは明らかである。交換される（された）関係の含みを残しているマルクスの単純、拡大、一般の価値形態論には問題がある。

4 価値表現の必然性—マルクスによる解決法

古典派に欠けていた価値にとっての価値表現の必然性、あるいは商品交換にとっての貨幣の必然性に気づいたことが、マルクスの価値形態論の発見につながった、と先に指摘した。それではマルクスはこの問題をどのように解決したのだろうか。次の文がそれを語っている。

ただ異種の諸商品の等置表現だけが価値形成労働の独自の性格を顕わにするのである。というのは、等価表現は異種の諸労働を、実際にそれらに共通なものに、人間労働一般に還元するのだからである（全集、68—9頁）。

価値形態論に先立つ商品論の第一節と第二節において、マルクスは二商品の交換関係は両使用価値の捨象による価値の抽象であり、それは同時に両有用労働の捨象による、価値として対象化する抽象的人間労働の抽象である、と説明していた。これを説明しているマルクスの文は難解であるが、この考えが下敷き

になっている。次の文は、前の二つの節と価値形態論との関係を説明しているとみられる。

われわれが価値としては商品は人間労働のたんなる凝固であるというならば、われわれの分析は商品を価値抽象に還元しはするが、商品にその現物形態とは違った価値形態を与えはしない。一商品の他の商品にたいする価値関係のなかではそうでない。ここではその商品の価値性格が、他の一商品にたいするそれ自身の関係によって現れてくるのである(全集, 68頁)。

前2節が2商品交換における還元による商品価値の分析だったのにたして、第三節は価値表現としての商品と商品の関係から価値性格が現れてくる関係の展開である、と説明している。価値形態論が商品交換論ではないことが、強くでている。

麻布商品、上着商品を作っているのはそれぞれ異種の有用労働であり、それぞれの価値を形成しているのは同一の抽象的人間労働である。しかし麻布商品の価値が抽象労働の対象化であることを現実を示すためには、麻布商品は上着商品を等価形態に設定することにより、上着商品が麻布にたいして直接的交換可能性をもつ(等置される)関係をつくらねばならない。このことにより麻布を作る有用労働は抽象的人間労働となり、麻布の価値を形成することになる。上着商品の方は等価形態と設定されることにより、それをつくる有用労働が直接、価値を形成する抽象労働の現象形態となる。要するに、有用労働の捨象による抽象労働の生成、それによる価値対象化は、二商品の相対的価値形態と等価形態の関係を通さねば、現実化できない。分析で抽象的に明らかになる関係は、価値形態論を通すことによって現実の現象になりうる。というのがマルクス主張と考えられる。

このように考えると、マルクスの価値形態論が、第一節(価値の労働による実体規定)と第二節(労働の二重性)を先行させ、労働実体規定と如何に深く結びついているか、を理解することができる。マルクスは等価形態の特徴として、① 使用価値が価値の現象形態となる、② 有用労働が抽象労働の現象形態となる、③ 私的労働が社会的労働の現象形態となる、の三つをあげた理由も理解できる。宇野弘蔵は①こそが本来の価値形態論であるとし、②と③を切り捨てたが、マルクスにとっては②こそが一番主張したかった点(③は②に付随して出てくる)だったようにみえる。少なくとも①は②を欠いては成立しないと考えられている。

以上の検討からすると、マルクスにとっては、価値が価値形態(あるいは価格)という現象形態として現れなければならない必然性は、抽象労働の価値として対象化は、相対的価値形態と等価形態という対極的構造を通して、両有用労働が捨象され抽象的人間労働が生成する、独自の関係においてしか現実化できないことになる。そうであれば、マルクスにとって価値形態論とは、たんなる価値表現論ではなく、同時に価値の実体規定の現実化、現象形態論でもあつ

たことになる。このように解すると、価値形態論に先行して第1節と第2節で、両有用労働の捨象、抽象的人間労働の価値対象化論をマルクスが説いた理由が分かる。

しかしこの考えは、すでに指摘したように、両有用労働の捨象論は商品交換を意味するが、これは商品の直接的交換を前提しない価値形態論の方法と矛盾する。資本の生産過程の所で明らかになるのではあるが、有用労働の捨象による抽象的人間労働の生成は、社会的分業をなす総労働の配分のなかで成立するものであって、二商品の交換において成立するものではない。商品価値の労働による実体規定は、労働力商品や資本が措定されたときに成立するものであり、商品論でそれを先取りして論じるのは、方法に無理がある。『資本論』の価値形態論の難解さは多分にこの方法の無理からきているのではないだろうか。

このように考えると、古典派の交換価値論は、価値にとって価値表現の必然性、価値にとっての価格の必然性、商品にとっての貨幣の必然性を捉えていないというマルクスの鋭い批判意識が価値形態論の創出につながったに違いないが、マルクスのそれらの必然性の解明にはまだ完全に成功したとはいえないことになる。

II

1 価値形態論と交換過程論の相違と関連

マルクスの価値形態論の特徴は、単純、拡大、一般、の価値形態のすべてにおいて、相対的価値形態と等価形態のどちらにおいても、商品所有者を捨象し、「商品と商品の関係」として展開していることである。この点は第二章「交換過程」を、次の文章で始めていることで明瞭である。

商品は自分で市場に行くことはできないし、自分で自分たちを交換し合うこともできない。だからわれわれは商品の番人、商品所持者を探さねばならない（全集、113頁）。

価値表現論としての価値形態論は「商品と商品の関係」として展開したが、商品交換は両所有者ぬきでは起こりえないから、この交換の過程を論じるときには商品所有者が登場することになる、とマルクスは考えている。両所有者を捨象して「商品と商品の関係」として展開した価値形態論に対して、交換関係論は所有者を登場させて商品交換を展開し、価値形態論を補完する位置を与えられているように見える。交換過程論との対比によって、価値形態論が「商品と商品との関係」の世界であることが鮮明になる。価値表現も麻布商品自身の等価表現として展開された。マルクスは価値形態論を「商品語の世界」と表現している。

だが両論には他にも相違がある。価値形態論が、序文に書かれているように、完成した価値表現である貨幣での価値表現から抽象された抽象規定(下向過程)

から完成形態へと展開する（上向過程）論理的展開である。これにたいして交換過程論は、商品交換から貨幣が発生する歴史的過程を論じている面がある。

マルクスの一般的価値形態論は、どの商品でも一般的等価形態に選ばれるなら貨幣となれるという論理になっている。金商品だけが貨幣になれる論理はでない。「われわれの商品所持者たちは、当惑のあまりファウストのように考え込む。だから彼らは太初（はじめ）に行為ありき。だから彼らは考える前に既に行ったのである」（116頁）、とマルクスは言う。

貨幣形態論の所では、一般的等価形態から貨幣形態への移行には「本質的な変化」はないと述べ、相違は「ただ・・・一般的等価形態が今では社会的慣習によって最終的に商品金の独自の現物形態に合生しただけである」（95頁）、としていた。この「社会的慣習」にたいする補足説明になっている。

しかし交換過程論には、商品が直接交換されたら物々交換であって、商品交換たりえないこと、市場経済は共同体と共同体の間から発生すること、貨幣になりうる商品は貴金属に限定されることなど、商品論では触れられていないが、商品形態を理解するには参考になるいくつかの興味ある論点が含まれている。だがここでは、価値形態の「商品と商品の関係」と、所有者を介した商品交換という分離した方法に焦点を当てて論じる。

実はこの問題は、すでに戦後すぐに始まった宇野弘蔵と久留間鮫造の論争に含まれていた。等価商品上着の使用価値で麻布商品が価値表現する場合、宇野は上着1着は麻布商品所有者の欲望対象でなければならない、と主張した。これにたいして久留間は麻布20ヤールの「純粋な価値表現」が価値形態の問題であり、上着1着が麻布所有者の欲望対象か否か、は問題外である、と主張した。それは、麻布商品の価値表現であって麻布所有者は価値表現自体には含まれない、価値表現は「商品と商品の関係」である、という主張になる。

両者の論争は平行線をたどったままに終わった。『資本論』の価値形態論の解釈としては、久留間の方に有利である。それを支持する文言が『資本論』には沢山ある。しかし宇野の問題提起は、どちらの解釈が正当なのか、にあったのではない。どちらが価値形態を正しく捉えているのか、にあった。今なおこの論争内容は検討するに値するが、ここでは取り上げない。

商品と商品の関係と捉える価値形態論と、商品所有者の関係と捉える交換過程論という分離という方法には、いくつかの問題が出てくる。

まず商品、またその価値、という概念はそもそも所有者を欠いて成立しうるものだろうか。それらは商品と商品の関係で成立するものであり、商品所有者はその商品概念の人格化したものにすぎない、という考えが広くある。しかし私は、これは価値形態論を理解しない悪しき唯物論だと考えている。

商品論第四節の商品物神性論では、マルクスは市場経済では本来「人と人との関係」が「物と物との関係」として現れる、という鋭い古典派批判の見地を展開している。この「物と物」は商品と商品、あるいは商品と貨幣の関係を指している。それが本来「人と人の関係」であるものが、資本主義では疎外され物象化して現れる、という論理である。この論理は所有者を捨象して商品と商

品の関係として展開する価値形態論の論理と矛盾しないだろうか。

他方では、商品交換を商品所有者の直接的な相互関係と見るのも問題がある。だがマルクス自身が単純な価値形態をそのように理解していた時期があった。初版付録に次のような例が語られている。

そこでわれわれは麻布生産者 A と上着生産者 B との物々交換を考えてみよう。彼らが取引で一致するまえには、20 ヤールの麻布は 2 着の上着 1 着にあたいする（20 ヤールの麻布=2 着の上着 1 着）と言い、これにたいして B は、上着 1 着は 22 ヤールの麻布にあたいする（1 着の上着 1 着=22 ヤールの麻布）と言う。最後に、長い間商談したあげく彼らは一致する。A は 20 ヤールの麻布は 1 着の上着 1 着に値すると言い、B は 1 着の上着は 20 ヤールの麻布に値すると言う（初版訳、131 頁）。

この例解は第二版では削除された。A と B はもはや商品生産者ではなく、一貫して商品所有者と規定されるようになった。生産者とする考えに問題があることに、マルクが気づいたことを示している。しかし商品が労働生産物であり、商品交換が有用労働の捨象であるという考えは保持された。また麻布商品の価値表現は上着所有者との直接的接触、交渉、合意を避けた麻布商品の一方的関係であるという認識が強化されたので、相互交渉はおかしい、とマルクスは気づいたに違いない。しかしこの是正は、価値形態論は両所有者を捨象した商品と商品の関係であるという見地を強化することになっており、問題の解決にはなっていない。

市場経済の特徴は、自分には不用な使用価値を交換によって他人に渡すと同時に自分の欲しい使用価値を手に入れようとする関係でありながら、所有者の直接的な接触を回避して交換し合う点にある。そのような特殊な社会関係の中に置かれた使用価値が商品である。それが交換される場が市場であり、そこにそのような使用価値を交換物として提供し、またそこで欲しい使用価値を交換によって手に入れようとするのが商品所有者であり、その場が市場である。この交換を両所有者の直接的接触(交渉、合意)などを回避して行うから、商品所有者同士の関係でありながら、商品と商品の関係として現れるのである。このように特殊な社会関係だからこそ市場経済は共同体と共同体の間から発生したといえるのである。

価値形態論は所有者を捨象した「商品と商品の関係」でもないし、直接、商品所有者と商品所有者の関係でもない。この微妙な関係を明らかにするのが、価値形態論の本来の課題であったのである。相対的価値形態に商品所有者の欲望を想定しないかぎり、等価形態、さらに価値形態を理解できない、という宇野の主張は経済学史上初めてこの問題に触れていたのである。

2 新地平を拓いた宇野の価値形態論

宇野の単純な価値形態は、麻布商品所有者が今 1 着の上着を欲していて、それには自分のもつ 20 ヤールではどうか、と交換希望を市場に提示している関

係である。この場合上着 1 着所有者はその場にまだいないから、麻布所有者の一方的な観念的な能動的関係である。上着所有者が現れてこの表示を見て、彼も麻布を欲し、しかもこの交換比率に納得がゆけば、直ちに交換が実現しうるから、上着 1 着は麻布 20 ヤールにたいして直接的交換可能性をもつ。だから相対的価値形態は商品所有者の能動的な行為なしには成立しない。等価商品の使用価値が価値の現象形態になりうるのは麻布所有者が欲する使用価値であるかぎりであり、上着 1 着という現物形態ではダメである。相対的価値形態も等価形態も麻布所有者を捨象しては成立しえないことになる。上着所有者は不在であるから、実際に交換される前の関係であり、麻布所有者の観念的な交換希望の関係として、単純な価値形態は成立している。

この単純な価値形態は「逆関係」を含まない。上着商品が相対的価値形態に立つと、今度は上着所有者が自分の欲しい商品を等価形態に置き価値表現することを意味するが、彼が麻布を欲しているとはかぎらないし、多くの上着 1 着の中に麻布を欲している上着所有者がいても、上着 1 着＝麻布 20 ヤールという交換比率に応じるとは限らないからである。また上記の価値表現式から麻布 10 ヤール＝二分の一の上着 1 着とか、麻布 200 ヤール＝10 着の上着 1 着とか、いう価値表現式も自ずと出てくるとは言えない。前者は半着の上着 1 着は使用価値をなさないから、後者は今麻布所有者は上着 1 着が欲しいのであり、10 着は欲しくないからである。この意味では、単純な価値形態を x 量の A 商品＝ y 量の B 商品という形の一般式で表すのは、実は不適當である。宇野原論は、理由を書いていないが、この一般式を単純な価値形態論では避けている。

また『資本論』では、等価商品は自己以外のどの他商品でもよい、とされているが、そういうことはありえないことになる。麻布商品所有者は上着 1 着以外にも欲しい商品があるから、等価商品は拡大することになるが、その場合も、欲しい商品量はその異なる等価商品に応じて、それと交換に提示する麻布の量は異なることになる。マルクスのように左辺に一律に 20 ヤールが並ぶことはありえなくなる。また等価形態に自己以外の全商品が並ぶということもありえない。麻布所有者が他の商品をすべて欲するということはありえないからである。

こういう点を明らかにしたのは宇野原論である。ただし一般的等価形態に麻布商品を設定する点は、旧原論は『資本論』と同じであった。拡大形態の「逆転」というマルクスの方法を避けようと宇野は努力しているが、一般的等価形態の成立の論理は解けていない。単純、拡大、一般の価値形態が貨幣形態からの抽象規定なのであるから、麻布の価格での価値表現と同じく、どの価値形態にあっても麻布は相対的価値形態にあると想定すべきだろう。宇野は一般的等価形態と貨幣形態の本質的な相違についても明確でない部分がある。このことは宇野の価値形態論もまだ完成しえていないことを意味している。

このような欠点があるとしても、宇野の価値形態論は相対的価値形態の方にだけ商品所有者を設定することにより、価値形態論の「商品と商品の関係」と、交換過程論の商品所有者と商品所有者の関係という考えの双方がもつ欠陥を克

服する道を拓いたといえる。麻布所有者の一方向的な関係であっても、上着商品にも所有者がいる以上、間接的な両所有者の関係である。しかし直接的な「人と人との関係」を避けているから、商品と商品との関係として現れるのである。宇野の価値形態のこの理解は、市場経済がなぜ共同体と共同体の間で発生し、なぜ血縁、地縁、民族、言語、宗教、国家などの壁を乗り越えてグローバルに発展しうるのか、を説明できる力を秘めている。

宇野の価値形態論での問題提起は、その後の論争を通して、商品、貨幣、資本の形態規定、価値実体規定の資本の生産過程での展開、さらには『資本論』の原理論としての再構成にまで及ぶことになった。宇野の価値形態論の新見解には、宇野自身も気づけなかったような威力が含まれていたのである。しかしその後価値形態論は宇野においても、宇野派においても大きな進展は見られていない。特に宇野派にあつては、宇野説が反芻されるだけで、かえって混乱、後退が起こっている。この点は具体的に指摘する必要があるが、別の機会にするしかない。今回は最後に私の新しい価値形態論を示すにとどめる。

宇野の『経済原論』上(1950年)では、商品論が商品形態論へ純化することにより、『資本論』よりも交換価値批判が一層進展することになった。宇野原論では、交換過程論は削除されている。だがそれは不要な物としての切り落としではない。むしろ『資本論』の交換過程論に散見する肯定面を価値形態論へ吸収する方向での削除であった。

『資本論』の商品論には、もう一つ、商品物神性論が第四節として含まれている。価値形態論とこれとの関連についても、触れておく必要がある。

3 価値形態論と物神性論との関連

この商品物神性論も、価値形態論が両所有者を捨象した「商品と商品との関係」として展開されたことから、その補完として必要になったものである。マルクスには初期から古典派の商品と商品、あるいは商品と貨幣の関係(交換価値)の考え方は価値の物神性に囚われたブルジョア・イデオロギーである、という批判意識をもっていた。古典派はいずれも価値に関わる概念をただ「物と物との関係」と思い込んでいるが、実は「人と人との関係」の疎外態、物象化にすぎない、という批判意識である。

ところが『資本論』の形成過程で価値形態を発見し、それを発展させてゆくと、第二版ではそれは所有者を捨象した「商品と商品との関係」として完成することになった。そこであらためてそれが「人と人との関係」が物象化したものであることを強調する必要がでてきた。そしてこの見地から価値形態論には見られなかった商品形態の大事な点を数多く指摘している。

使用価値が価値をもつのは自然なことと見る古典派にたいして、それは不自然だという感覚がマルクスにはある。使用価値という自然物が、価値という社会的属性をもつのはおかしい。マルクスが商品を繰り返し「感覚的であると同時に超感覚的」と言うのはそのためである。商品と商品との関係としての価値は、実は「人と人との関係」の物神化したものにすぎない、というのが物神性

論のテーマである。自然物が価値という社会的属性をもって現れるという商品の「謎のような性格はどこから生じるのか?」。この問いにたいしてマルクスは次のように回答する。

商品形態は人間にたいして人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として反映させ、これらの物の社会的な自然属性として反映させ、したがってまた総労働にたいする生産者たちの社会的関係をも諸対象の彼らの外に存在する社会的関係として反映させるということである。このような置き換え *Quid pro quo* によって、労働生産物は商品になり、感覚的で超感覚的なものになるのである（全集、98 頁、なお、全集は *Fetischcharacter* を呪物的性格と訳しているが、本稿ではそれを物神性としている）。

商品物神性の問題も、マルクスは価値形態論と同じく、価値の労働による実体規定と関連させて解決しようとする。すでに指摘したように、価値の実体規定は後の資本の生産過程でしか展開できない。商品論で問題になる「社会的関係」とは、商品所有者たちの関係であって、「生産者たちの社会関係」ではないことになる。ここでマルクスは「総労働」の社会的配分まで考えているが、それは、資本の生産過程で初めて措定されるのであって、恣意的な密輸入になる。商品を労働生産物と規定するのと同じく、恣意的な論理の先取りである。

「商品世界の物神性は、前の分析がすでに示したように、商品を生産する労働の特有な社会的性格から生ずる」（全集、98 頁）がマルクスの立論である。だが商品論での物神性は、本来商品所有者間の特有な社会関係が「商品と商品との関係」として現れることから生じる。「人と人の関係」も、商品所有者の関係と考えると、具体的に理解できる。マルクスは価値の社会性は価値の実体である労働の社会性からくると考えることによって、この肝心な点を見逃すことになっている。そのように考えてこそ、商品形態の謎はどこから生じるのか? という問いにたいして、「明らかにこの形態そのものからである」（同、97 頁）と答えることができるのである。

この意味では、商品物神性論も、価値形態論が商品所有者の特殊な社会関係が生み出す関係として再編成されるならば、そこへ吸収しうるのである。宇野原論は、交換過程論と同じく、商品物神性論も商品論から削除したが、こちらの方の理由は宇野は説明していない。価値形態論にとっては不要とみなされたのは確かであるが、物神性論が原理論にとって不要と考えていたとみなすのは問題がある。資本の生産過程や利子生み資本では触れているからである。たんにイデオロギー論として削除されたと見るのは早計だろう。

ともかく第四節商品物神性論と第二章交換過程論の削除によって、宇野は商品論の構成を、第一節要因論、第二節価値形態論、第三節貨幣形態(価格)と確定した。これは、宇野原論の功績である。論理的展開で構成される原理論にあっては、構成自体が論理をなしているから、構成に不備があると必ず論理に不具合を生じさせる。『資本論』の商品論の構成の複雑さはその後の研究に混乱をもたらす一因になってきた。ただし宇野はこの三つの節がどのような論理的関

係にあるのか、を説明していない。本稿では私の理解で説明を試みる。

以上、『資本論』の商品論の問題点を、価値形態論に焦点を当てて、指摘してきたが、次に私の価値形態の理解を説明してみよう。

III

1 価値形態論と要因論との関連

価値形態論において誰もが最初に陥る誤りがある。それは、価値形態論は価値表現論であることから、単純な価値形態を、麻布商品 20 ヤールが自分の価値を等価値の上着商品 1 着で表現する関係と解する、ことである。この場合、麻布も上着も最初から価値をもった商品であると想定されている。だが麻布も上着もそれ自体では物体であって、社会的属性としての価値をもつことはありえない。

だから個体としては麻布や上着もそれ自体では商品ではありえない。マルクスが「ある一つの商品をどんなにいじくりまわしてみても、価値物としては相変わらずつかまえようがない」（全集、64 頁）、「商品进行分析して価値を発見した人はいない」などと発言しているのも、彼がそれを感じていたことを示している。

しかし麻布と上着を等労働の対象化した商品と前提することにより、単純な価値形態を、麻布商品 20 ヤールの価値から出発し、表現材料としての上着 1 着との等価値関係として、単純な価値形態を説明している。だからこそ逆にすると、別な価値表現式になると注意しながら、「逆関係を含む」とか、等価商品は自己以外のどの商品でもよいとか、麻布 10 ヤール＝上着半着とか、発言したのである。この考え方は、交換価値そのものである。この常識は、最初からすべての商品が個体として価値をもっているという想定から成り立っている。それはすべての物体が秤にかけられる前からそれ自体で重量をもっているのと同じように解されている。

マルクスは上着 1 着が麻布 20 ヤールの「価値の現象形態」となる関係を、棒砂糖の重量表現が分銅の鉄によってなされる関係を例にして、説明している（全集、77 頁）。一商品の価値が他商品の使用価値で表現する関係の例として一面適切であるが、不適切な面がある。それをマルクスは次のように注意している。

「とはいえ類似はここまでである。鉄は棒砂糖の重量表現では、両方の物体に共通な自然属性、重さを代表している。ところが上着は、麻布の価値表現では、両方の物の超自然的な属性、すなわちそれらの価値、純粋に社会的なあるものを代表している（同、77 頁）。

この注意だけでは不十分である。重量は物体が個体として持っている。価値は商品が個体としてある場合はもちえない、商品と商品との関係の中でしか持ちえない点を指摘せねばならない。価値が「純粋に社会的なもの」とマルクス

が言う場合、それは価値＝労働対象化説にもとづく労働の社会性を意味しているが、商品論では価値実体規定を触れえないから、それは商品所有者と商品所有者の関係を隠れた基礎とする「商品と商品の関係」ということになる。商品と言ひ価値と言ひ、それらは商品と商品の関係のなかで、初めて現実に存在しうるのである。その関係を明らかにするのが価値形態論ということになる。

麻布所有者が今上着 1 着を欲している、それに自分の 20 ヤールが適量であると考えて、交換の意思表示をしている関係が単純な価値形態である。この関係において初めて麻布 20 ヤールが価値をもち、現実に商品となる。また上着 1 着もこの関係のなかで価値をもち商品となる。麻布所有者も上着 1 着所有者も、それぞれの使用価値を、自分にとっては非使用価値であり交換すべき物として所持していることは、すでに要因論で設定されている。以上のような関係を麻布所有者が設定したとき、現実に商品になる。商品形態をとる、というのはこれを意味している。どちらの商品も価値をもち、商品となるからといっても、左辺の商品では所有者がおり、右辺では不在である。右辺の商品の使用価値は左辺の商品への直接的交換可能性をもち、左辺の商品は右辺の商品への直接的交換可能性を喪失する、という対極的な関係である。マルクスはこの対極を相対的価値形態、等価形態と区別した。交換価値論ではこの区別はできなかった。ところが等価商品はどの他商品でもよい、「逆関係を含む」という発言はマルクスにあってさえ、まだ交換価値概念の批判が不十分であったことを示している。

以上説明したような関係内容をもつかぎり、麻布 20 ヤールの価値が上着 1 着で表現するという単純な価値形態は成立する。だから単純な価値形態での価値表現が成立するためには、多くの制約があることが分かる。他のどの商品でも価値表現できない。欲しい商品でしかできない。それに合わせて自分の商品の交換量を設定するしかないから、今交換に提供したい自分の商品を全部価値表現できるとはかぎらない。交換価値論ではこれらの制約は全く見えない。どの商品も最初から価値をもち、どの商品とも交換できると想定されているからである。

2 価値にとっての価値形態の必然性

これまでの私の説明に対して、要因論ではすでに、価値と使用価値をもったものが商品と規定されているのだから、価値形態論で初めて使用価値が価値をもち商品となるというのは、矛盾があるのではないか、という疑問が生じるだろう。マルクスの場合、要因論で商品とは、労働の対象化した価値をもった使用価値であり、その価値が「商品と商品の関係」で現象形態をとるのが価値形態論である、と考えられている。要因論で商品が成立し、それが現実に現れるのが商品形態であるとされている。宇野原論も、実体規定を捨象された価値概念であるが、要因論と価値形態論の関連はそう考えられている。確かにそう考えた方が分かりやすい。しかし両論は論理的展開の先後関係であり、商品の論理を厳格に考慮すると、その考えに満足しておれなくなる。

商品は価値をもった使用価値といっても、自分にとっては使用価値ではなく、

交換相手の他人にとっての使用価値にすぎない。だからただ使用価値と言うだけでは価値をもちえない存在なのである。また価値なるものは、二人の使用価値の所有者が交換関係に立つときに、使用価値に付属することになる社会的性格にほかならない。一つの商品を抽象すると、商品特有の使用価値も捉えられないし、価値も捉えられない。一商品を抽象し、その中に価値と使用価値があると規定することは、実はできないとしなければならない。

マルクスが商品の価値を論じるときに、まず交換価値から価値を抽象する方法をとったのは、もしかするとこのことを感じていたのかもしれない。商品进行分析して価値を発見した科学者はいないと言っている。しかし価値形態論に先立って、要因論では商品の内には価値と使用価値の二要因があるという規定は必須である。これが先行していないと価値形態論も展開できない。

宇野は、商品が貨幣とともに存在する現実の価値表現(価格表示)から出発し、個々の商品の価格表示を例に挙げながら、商品の価値を全商品の量的にのみ相違する同質性と規定し、使用価値を全商品の異質性と規定する。そして商品をこの「双反する二要因」からなるとし、「それは同時にまた商品が、そのままでは

価値でも使用価値でもない」と述べている。さらに「売れてみなければ実は価値にも、使用価値にもならないという過程的存在なのである」(著作集第一巻、29頁)と書いている。『資本論』よりも商品の本性を鋭く捉えているとあってよい。

私は、商品論は、資本主義経済はまず無数の商品だけからなる商品世界として現れ、個々の商品はそれを構成する単位(細胞)をなし、量的のみ異なる同質性として価値をもち、異質性としては使用価値をなすという形でなら、一商品の価値と使用価値という要因を規定できるし、価値形態論に先行して規定せねばならないと考える。この商品世界という語は、『経済学批判』の商品論ではまだ登場しなかったが、価値形態論が登場した『資本論』の商品論では多用されている。『資本論』の解説書、研究書ではほとんど注目されていないが、商品論には不可欠な重要な概念である。宇野原論の要因論でも使われていないが、「価値としての商品は物としてはいかに異なるにしても、すべて同質でのものとして計量しうるのものであって、その点では個々の商品は全社会の商品の総価値の幾分子かを分有するものとしてある」(著作集第一巻、28頁)という記述は、商品世界の考えがあることを示している。『資本論』冒頭の要因論は次の文で始まる。

資本主義的生産様式の支配的に行われている社会の富は、一つの「巨大な商品の集まり」として現れ、一つ一つの商品はその富の基本的形態として現れる(47頁)。

「巨大な商品の集まり」に触れながら、ここではマルクスは商品世界という語を使っていないが、商品世界を意味していると解すべきであろう。つまり、純粹資本主義社会からの最も抽象的な規定は、商品世界である。残念なことに

『資本論』の要因論ではこの語は使われていないが、それはマルクスが商品価値の抽象的人間労働による規定に集中したためであろう。

私はさらに、商品世界は、実は商品所有者たちの世界を基礎とし、それが商品だけの世界として現れたもの、という規定を要因論でしておく必要がある、と考えている。そうすると、商品の使用価値が現物形態 **Naturalform** として価値をもちうることはなく、「他人のための使用価値」としてのみ価値をもち、商品たりうることも最初からはっきりする。また商品なるものが所有者を捨象しては本来ありえないことも明瞭になる。

第二節価値形態論では一転して、この商品世界は現実には、二人の商品所有者の交換関係を基本として成立するものであることを明らかにする。商品世界は、この具体的な二人の交換関係が生み出す私的な「商品と商品の関係」の総体でしかなく、それ自身では現実化できない抽象的概念にすぎなかったことになる。

しかも二商品の交換関係は、交換価値論のように交換された（あるいは必ず交換される）関係ではなく、一方の商品所有者の他方の商品との交換希望の関係（未交換関係）である。それは麻布所有者と上着所有者の関係には違いないのであるが、上着所有者との直接的接触を回避した特殊な社会関係である。だからこの関係の中に置かれた二つの使用価値は、価値をもち商品となる。それは「商品と商品の関係」を通して展開される。要因論が、価値と使用価値をもったものが商品であるという抽象規定に留まったのにたいして、価値形態論はそれらの現実化する姿を展開する。それが単純・拡大・一般の価値形態論であり、その展開は同時に両極での相対形態と等価形態での価値形態、使用価値形態、商品形態の展開でなければならない。このことはすでに述べた。

価値形態論は、たんなる「商品と商品の関係」として説いてはならないが、所有者同士の関係としても説いてはならない。左辺の交換希望を表明する所有者が、右辺の所有者との接触を避けて、一方的に（観念的に）取り結ぶ関係として展開せねばならない。

マルクスは、要因論は商品とその価値を明らかにし、価値形態論はそれらの現象形態を展開するものと考えている。この考え方自体は間違いではない。しかし価値を抽象労働の結晶したものとし、価値をもった使用価値を労働生産物として、商品がそれ自体で成立しているかのように展開しているのが問題である。このために常識的な交換価値論が見失った、価値にとって価値形態の必然性を問題意識しながら、それを誤った方向で解決を求めることになった。それが等価商品との等価値関係により、両有用労働が捨象され、相対的形態と等価形態という対極的關係において、両商品の価値が抽象的人間労働の対象化としての現実化し、「価値の現象形態」になる、という複雑、難解な説明となった。マルクスが、商品価値が価値形態をとる必然性は価値概念そのものに含まれる、というとき、その意味には価値の実体としての労働の問題が含まれている。だがこの必然性の解明は最初から商品論でそもそも価値の実体規定ができるのか、という難問を抱えており、解決に成功しているとは言い難い。

宇野は「商品の価値は、それ自身で自らを表現しうるものではない。同質性は他の商品によらなければ表現されえない」（著作集第一巻、31頁）、という文から価値形態論を始めている。価値にとって価値形態の必然性が価値形態の問題であるという認識はあるが、その原因についての関心は示されていない。

私はその必然性は、商品価値なるものが本来商品と商品の交換関係から発生するものであるからである、と考えている。

それでは商品の価値とは、商品と商品の関係であって、商品に内在的な価値はない、と主張したベイリーと同じではないか、と反論する人が必ずいるに違いない。私は商品の価値は商品の交換関係において両商品に発生し、それは両商品の等価値関係（交換比率、交換価値）として現れる、と言っているのである。あらかじめ商品価値が成立しており、両商品の等価値関係として「価値の現象形態」がその後に成立するのではなく、両者は同時に成立する関係にある。秤にかけなくとも重量をもつ物体の重量表現とはこの点でも異なっている。ベイリーの誤りは、価値は交換価値としてしか現れない事実から、商品の内在的価値の存在を否定してしまったことにある。しかしこの考えでは、なぜ交換価値が成立するのかを説明できない。ただ交換価値としてしか現れない事実にしがみついているにすぎない。

だから商品価値にとって価値表現ないし価値形態の必然性は、価値なるものは、両商品の交換関係において、一方では両商品の内在的価値として、他方では交換価値として、同時に発生するものであることから来ていることになる。価値にとって交換価値の必然性（リカードに欠けていた）、交換価値にとって価値の必然性（ベイリーに欠けていた）をどう解くか、という経済学の永年の課題は以上のように理解すると解決できるのではないか。

だからマルクスのように、まず商品価値の実体規定をして、次にそこから「価値の現象形態」の必然性を追求するという方法は、一方では価値形態の発見という功績を生んだが、他方では、最初から解決できない問題を追及していたことになるのではないか。

3 単純な価値形態と貨幣形態

以上の多くの問題点を指摘した以上、今度は私自身の価値形態論を展開する必要があるが、紙面が限られているから、拡大された価値形態、一般的価値形態、さらに貨幣形態の具体的展開は、ここでは省略するしかない。『市場経済という妖怪』などにも幾らか書いている（第1部第二章）ので、そちらを参照していただきたい。本稿では最後に単純な価値形態と貨幣形態（完成された貨幣での価値表現—価格表示）との関係について論じておきたい。

単純な価値形態が、商品の貨幣金での価値表現からの抽象であることは、マルクスの価値形態論の序文で、「貨幣形態の生成」の論理を最も単純な価値表現から貨幣形態まで追跡する、と説明おり自明である。宇野も久留間もこの点では一致している。しかし麻布商品 20 ヤールの上着商品 1 着での価値表現において、上着 1 着が麻布所有者の欲望対象として選ばれているか否か、をめぐっ

て宇野と久留間は対立する。価値形態論が「純粋な価値表現」の問題である以上、上着 1 着が欲望対象かどうか、は問題外である、と久留間は主張した。それは商品同士の等価値関係の問題であり、麻布所有者の存在もこの関係では排除されている、という。

久留間がそう主張する根拠は、貨幣である金商品の価値表現（価格表示）では、商品所有者は金商品を自分の欲望対象として設定することはないという事実に基づいている。商品所有者も貨幣金を欲し交換希望として一般的等価の金商品を求めている点は、単純な価値形態において、麻布所有者が等価商品としての上着 1 着を交換希望しているのと同じである。だが貨幣形態では、貨幣金を使用価値として商品所有者は求めているのではない。価値物として求めている。貨幣での価値表現では商品所有者の使用価値への欲望は捨象されている。このことから単純な価値形態も価値表現である以上、麻布所有者の上着 1 着への欲望は捨象されている、と考える。これが久留間説の基本である。

これに対して宇野は、等価商品の使用価値への欲望捨象は貨幣形態において初めて成立するものであり、貨幣が捨象された 1 商品の他商品の使用価値での価値表現では、まだ等価商品上着 1 着への麻布所有者の欲望は捨象できない。むしろそれを前提にしないと単純な価値形態は成立しえない、と主張した。そして新たな単純な価値形態、拡大形態、一般的価値形態を展開した。

しかし現在からみて、宇野およびその後継・発展をめざした宇野派の人々が、貨幣形態（価格表示）における商品所有者の欲望捨象の論拠を十分に明らかにしている、とは私は考えていない。その意味では宇野・久留間論争はまだ最終決着に至っていない。

単純な価値形態が成立するためには、相対的価値形態での所有者の存在（反対に等価形態での所有者の不在）、その所有者の等価商品の使用価値の欲望対象として選定（反対に等価商品は対象とされるだけで、その所有者は何もしない）、という特殊な所有者の関係が必要であることは、すでに説明した。商品と商品との関係としての価値表現が成立しうるのは、このような商品所有者の特殊な関係のために他ならない。宇野の麻布所有者の欲望の強調は正しいが、なぜそうなのか十分に説明できているとは言えない。

上着 1 着は、マルクスが見抜いたように、なぜ麻布 20 ヤールへの直接的交換可能性という属性をもつのか。マルクスは両有用労働の捨象をからめて使用価値が「価値の現象形態」となることから説明しているが、明快とはいえない。

むしろ先に麻布所有者が今上着 1 着が欲しくて、それには自分の 20 ヤールではどうか、と交換提示しているから、上着 1 着が麻布 20 ヤールにたいして直接的交換可能性をもつと考えた方が明快である。つまり等価商品の使用価値が直接的交換可能性をもつという発見は画期的であるが、相対的価値形態での商品所有者を欠いては十分な説得力を欠いているのである。

したがって単純な価値形態から貨幣形態（価格表示）への展開の一焦点は、なぜ単純な価値形態論では必要であった、等価商品の使用価値への所有者の欲

望が、貨幣である金商品での価値表現では消えてしまうのか、にあることになる。

それには拡大、一般の価値形態を経過する必要がある。拡大された価値形態では、けっして自己以外のすべての商品が並ぶことはあり得ないことはすでに指摘した。相対的価値形態の商品所有者の欲望は、たんなる欲望ではない。自分の商品を交換提供しうるかぎりでの欲望である。だから多くの商品をもっている人では、最初は必需品から始まり、次第に日常不可欠ではない奢侈品が並ぶことになる。少ない商品しかもちえない人は必需品の範囲で終わるしかない。こうして貧富の差が市場経済では芽吹くことになる。これは商品にも反映し、日常不可欠な商品で一般的な大量の商品は低級品、より奢侈的な数少なくて入手困難な商品ほど高級品という差別が生じてくる。商品世界は形式的には平等であるが、実質的には不平等な世界であることを現わしてくる。

拡大形態では、等価形態には自己以外のどの商品も並ぶことはあり得ないが、相対的価値形態にはどの商品も立つという意味でも、拡大された価値形態である。そうすると星雲のような混沌とした世界になる。しかしこの混沌の中から、相対的価値形態によく立つ多数の商品と等価形態によく選ばれる高級な少数の商品という差別が生まれてくる。後者は奢侈的な高級品に限定され、さらにその中においてもより高級なものの選別が進む傾向がある。このようにしてごく少数の高級品が一般的等価商品として残ることになる。それは貴金属になる。その商品を共通の等価商品としている多くの商品所有者のグループを取り出したものが一般的価値形態になる。

だから一般的価値形態では、『資本論』とは違い、まだ一般的等価商品以外の全商品が左辺に整列しえないことになる。他の一般的等価商品を選んだグループも並存していると考えねばならない。この状態は不安定である。そのグループ内では、同一の等価商品の使用価値量によって、相互の価値量を比較できるが、他のグループの商品に対してはそれができない。だから複数の一般的等価形態の併存には、一つの一般的等価商品への統一への作用がある。それは複本位制が過度的なのに似ている。

マルクスのように、「全体的価値形態」としての拡大形態の「逆転」による一般的価値形態の成立という方法は、価値形態論に反している。マルクスが一般的等価形態に麻布商品を設定したのには、「一般的等価形態は価値一般の一つの形態である。だからどの商品にも付着することができる」（全集、93頁）ということを示すためでもあった。一般的等価形態は「ただ商品世界の共同の仕事としてのみ成立する」（90頁）のだから。

しかしこれは形式的な論理である。一般的等価商品は諸商品の「共同の仕事」によって成立するにしても、その候補の選定には、奢侈的な高級品でなければならないという制約が存在している。金でなくとも一般的等価商品になれることを示す必要があるが、それは麻布のような日常品では無理である。例えば銀のような例を挙げるべきだろう。この例は銀以外の商品、例えば金を一般的等価とするグループが並存していることを暗示している。

一般的等価形態の特徴は、まだ唯一の一般的等価商品が未成立であること、したがって相対的価値形態に等価商品以外の全商品が整列しえていないことにある。一般的価値形態においても、相対的価値形態に商品所有者の設定が必要である。先のマルクスの「商品世界の共同の仕事」とは、諸商品所有者の共通の使用価値を欲するという「共同の仕事」である。ここにおいても共通の等価商品の選定は、共通した欲望によるのでなければならない。このように考えると、単純、拡大、一般の価値形態には、相対的価値形態に一貫して商品所有者がいることになる。先に、価値形態論では麻布商品所有者は一貫して相対的価値形態に設定さるべきと述べたが、このような理由からである。ただし同じく等価商品の使用価値への欲望といっても、必需品から奢侈品へ、間接的な欲望へと大きく変化してきている。

以上、一般的価値形態は、複数の一般的等価形態の許容、一般的等価商品以外の全商品の左辺での整列の未達成という限界のなかで存在しうる過度的なものである、と同時に一般的等価商品への統一、その商品以外の全商品の相対形態への整列への絶えない衝動を秘めている。しかしこの傾向から自動的に貨幣形態が成立するとはいえない。貨幣形態の論理的な生成のためには、単純、拡大、一般の価値形態の発展が必要であるが、その発展の延長だけから、貨幣形態が生成するとは言えない。ここに価値形態論の限界がある。

4 一般的価値形態の貨幣形態への転化

商品論の第一節要因論では商品は商品世界の一分子として存在することを明らかにするが、商品だけで構成する商品世界は抽象規定であり、けっして現実化できないことも明らかにする。商品は二人の私的な交換関係のなかで、対極的な相対的形態と等価形態においてのみ現実化することを、価値形態論は鮮明にする。交換価値のような対極性のない同質的な交換関係からはこの認識は生まれない。マルクスが価値形態論で、価値と区別された価値形態、商品と区別された商品形態という語を使ったのにはこの意味が含まれている。

商品は現実には対の二商品の交換関係においてしか現実化できない。この事態の出現は、拡大、一般の価値形態が進展するにつれ、商品世界を混沌に陥れ、商品世界が後景に退き、見えなくなる。しかし一般的等価商品の統一、それ以外の全商品の相対形態への整列という新たな事態の出現は、その商品世界を復活させ、現実化することになる。この場合の統一された一般的等価商品が貨幣である。商品世界なるものは、商品だけの世界としては現実化できず、貨幣をもつことによってしか現実化できないことが明らかになる。一商品の価値を他商品の使用価値で表現するという価値表現は抽象規定であり、現実には貨幣である金商品の使用価値（重量）での表現（価格表示）で行われる。これが貨幣形態における価値表現の完成である。

この事態の出現は、単純、拡大、一般の価値形態の発展を基礎にしているが、そこから自動的に出現するのではない。私が転化と呼ぶのはこのためである。マルクスは貨幣形態を価値形態の第四形態としているが、これでは不十分であ

る。貨幣形態の成立は、第一節、要因論の商品世界の復活という契機を必要としている。この考えから私は商品論の構成は、第一節要因論、第二節価値形態論、第三節はその両説の統一としての貨幣形態論、でなければならないと考えている。²

この現実的な商品世界の成立によって、価値形態論とは違った新たな規定が次々と出現することになる。その第一は、一般的等価形態の独立と一般的相対的価値形態の独立である。一般的価値形態論では、右辺の一般的等価商品は、左辺の諸商品所有者の同一の等価商品を選ぶという「共同の仕事」に支えられてのみ、成立しえた。しかし貨幣形態になると、一般的等価商品はこの支えなしに、最初から一般的等価商品として現れることになる。金は生まれながらに価値をもち全面的交換力をもった商品、つまり貨幣として現れる。だから貨幣を一般的等価商品と規定するだけでは、不十分である。このように独立した一般的等価商品が貨幣であると規定せねばならない。

次に左辺の一般的相対形態においても重大な変化が起こる。商品世界の現実的成立による一般的等価形態の独立に対応して、一般的相対形態の独立もおこる。価値形態論では相対形態の商品は、欲望対象の等価商品を選定し、それにたいして交換できそうな自分の使用価値量を決定しうるかぎり価値をもち、価値表現できたが、この独立により相対形態の全商品は最初から価値をもった存在となる（あくまでも商品所有者の頭の中で）。これにより等価商品での価値表現は、もはや商品所有者の欲望を前提することなく、貨幣である金商品の物体（重量）で表現できることになる。マルクスが単純な価値形態において、等価商品の使用価値で表現する意味を、「現物形態」*Naturalform* で表現すると強調しているが、それは実は貨幣形態で初めて成立するのである。

また商品所有者は最初から自分の交換したい商品量全部を貨幣金で価値表現できるようになる。貨幣形態での価値表現が、『資本論』と異なり、一般に商品の使用価値の1単位をもってなされることを、明らかにしたのは宇野原論である。宇野派でもこれが継承されているが、宇野がそうであったように、その理論的根拠はまだ説明されえていない。

久留間の、麻布商品所有者の欲望が捨象されているのが、「純粋な価値表現である」という説は、実は貨幣形態で初めて成立する価値表現を、切り取ってきたものである。それは論理的抽象ではなく、恣意的な抽象である。

実は常識的な交換価値という概念、つまり商品が、物体が重量をもつように、最初から価値をもっており、どの商品とも交換できるという表象、も実は貨幣での価値表現からの恣意的な形式的抽象であることが分かる。確かに貨幣形態

² 商品論の論理構成については、『資本論』と宇野原論の比較対照を、Nagatani, 'Value-form and the Mystery of Money' で論じている。

が成立すると、すべての商品はその所有者の主観においては最初から価値を持ち、その量的相違を貨幣である金量で、商品所有者の金の使用価値に対する欲望を持ち出すことなく、表すことになる。しかしその事態は、一般的等価形態の独立と一般的相対形態の独立によるものである。それが可能なのは、貨幣が対極で成立しているからである。価格での価値表現が成立すると、もはや商品の価値表現が一般に貨幣をもってしか行われなくなる。商品と商品の交換が例外的に行われる場合も、それぞれの商品が前もって価格に換算されて、交換されることになる。貨幣が存在している場合の価値表現を、貨幣が捨象された場合の価値表現にそのまま持ち込む、言い換えると、貨幣の捨象された関係においても、その価値表現が妥当すると信じる、ことから交換価値の常識は成立するのである。

また現実の商品の価値表現が価格表示でしかないことから、単純な価値形態なるものは物々交換と同じく非現実である、という主張も生まれるが、貨幣形態の論理的抽象の欠如から生まれるものである。

結語 価値表現とは何か

最後に、そもそも価値表現とは何か、という点を問題にすることにする。このような基礎的な概念が今もって経済学では確定されているとは言えない。価値形態論が価値表現論であることは、『資本論』も繰り返し強調しており、マルクス経済学内に共通理解がある。しかしマルクスの言う価値表現とは、第一節での商品価値の労働対象化説により、等労働量関係にもとづく、一商品の価値の他商品の使用価値による表現ということになる。だから労働を捨象すれば、およそ商品の価値も価値表現も考えられないことになる。今もって、商品論は価値の実体規定が捨象された商品形態論である、価値形態論は実体規定抜きで展開されねばならない、という宇野弘蔵の説に対して、根強い反対があるのもこのためである。

では、商品価値の現実の価値表現である貨幣金での価値表現、価格表示で考えてみよう。1ヤールの麻布=100円、一袋の茶=500円という形で値札が付けられて店頭には置かれているのが、それである。麻布所有者はこの価格をつぎのように考えながら、必ず付けることになる。市況を見て、100円以上で売れば得であるが、それでは無理だろう。100円以下ならすぐ売れるがそれでは損になる。

迷った末に100円の値札で売りに出すことになる。この価格を決めたのは、麻布所有者であるが、彼または彼女にそのように決断させたのは市況である。そのように価格の逡巡を一定の価格へ帰着させうるのは、麻布1ヤールの価値と貨幣100円の価値がそこでちょうど一致すると思うからである。価値表現とは、商品所有者が貨幣所有者と相談することなく、一方的に、したがって彼・彼女の主観的な行為である。だからそこには彼・彼女の希望的観測が含まれる。しかしそれだけで価格表示が決まるわけではない。必ず市況によって客観的な

規制を受ける。この規制力こそが商品価値と貨幣価値の存在を示している。

100 円の値札を付けても、それは彼の主観的判断であり、それで売れる保証はない。90 円で売れたとしたら、それが麻布 1 ヤールの真の価値だったということになる。それは実現価値、価値尺度の問題であり、貨幣論に属する。ここではその前の売り出す時の価値表現の問題であり、貨幣形態が登場しても、商品論の範囲である。

円というのは金の使用価値の一定量（重さ）に法律で付けられた呼称にすぎないから、今 1 ミリグラムの金に 1 円という呼称が与えられているとすると、上の価値表現式は 1 ヤールの麻布 = 100 ミリグラムの金、1 袋の茶 = 500 ミリグラムの金という価値表現式と同じである。麻布所有者は 100 ミリグラムの金以上の価格で売りたいのであるが無理だろう、それ以下ならすぐ売れるだろうがそれでは損だと迷った末に 100 ミリグラムの金に落ち着いた。市況が強制するその交換比率（表示価格）は、1 ヤールの麻布の価値と 100 ミリグラムの金の価値とが一致していると麻布所有者が思うからである。1 ヤールの麻布商品の価値表現とはこのことである。この価値表現は、等労働量であるか否か不問のまま規定できる。またそう規定せねばならない。

価値による客観的規制といっても、商品論ではまだ商品所有者が売り出す時の主観的判断に対する規制であり、価値尺度の時のように、売買実現による売り手と買い手の双方にとって客観的な規制ではない。だから貨幣形態においては、商品価値は表示価格において現れると言っただけでは不十分である。商品所有者が価格を表示する際に、市況によってその価格がある水準へと落ち着かされる作用が伴っていることを指摘しなければ、真の価値表現とは言えない。

価値表現が形態規定であることを初めて明らかにしたのは、宇野である。しかし宇野は、このようにはっきり言っているわけではない。ここでの価値表現の理解は、私独自のものである。

だから、等労働だから価値表現である、というマルクス経済学の伝統的な考えは、実は価値表現を捉ええなくさせることになる。価値にとって価格の微妙な変動（といってもこの段階では商品所有者の心中においてにすぎないが）が捨象されてしまうからである。資本の生産過程においては、価値表現や価値尺度が等労働関係を基礎にして成立するという、重要な価値の実体規定が成立するが、価値表現のこの形態規定は貫いている。価値表現の形態規定を見失うことから、価値の労働による実体規定が、労働を価値とする仮説、あるいはドグマに転落することになったのである。

以上のように価値表現の理解からすると、単純な価値形態はどのような意味で価値表現といえるのだろうか。

宇野は単純な価値形態から価値の労働による実体規定を抜き、価値が表現される右辺の商品の使用価値は左辺の所有者の欲望対象でなければならない点を明らかにした。しかし等価形態の使用価値が左辺の商品の価値の現象形態である、という点は継承している。私の理解では、これだけでは単純な価値形態が麻布商品の価値の表現をなすとするのは不十分になる。

麻布所有者は今上着 1 着を欲しているが、それを交換で手に入れるには、自分の 19 ヤール以下なら得だが無理だろう。21 ヤール以上なら容易だが損になる、と自問し、市況に規制され 20 ヤールで決心する。このかぎり、麻布 20 ヤールも上着 1 着も価値をもち、前者の価値を後者の使用価値で価値表現する、と言えることになる。もし麻布所有者のそのような動揺が一定の価格に落ち着かない場合もありうる。そのときは両商品には価値がないことになり、商品でもないことになる。市況が一定価格に判断を落ち着かせるかぎり、両使用価値は価値をもった商品となり、価値表現が成立する。単純な価値形態とはこの場合だけを問題にしているのである。

むしろそれは麻布所有者の心中において両者が価値をもつにすぎない。麻布所有者が主観的にそう思っているというにすぎない。実際に価値をもっているかどうかは、上着所有者によって交換が実現されねばならないが、価値形態論では上着所有者は不在であるから上着 1 着が直接的交換可能性をもつにすぎない。この意味での価値表現は、拡大、一般の価値表現でも貫いている。

価値形態では、先に等価商品の種類と量が決まり、それに合わせて相対形態の方の商品量を調整することになる。こう考えると、左辺に所有者がいること、右辺には所有者がいないこと、は自明になる。しかし貨幣形態では反対になる。交換すべき商品全量は最初から価値をもったものとして現れ、商品所有者は貨幣としての金商品の使用価値にたいして欲望をもって関係することはない。全面的な交換力をもった金物体で価値表現することになる。そのために左辺に使用価値一単位の商品が整列し、すべての商品はその価値を、右辺の金量を調整する（つまり商品所有者が心中で迷いながら表示価格を決める）形で価値表現することになる。これが価値表現の完成である。価値表現が所有者を捨象した「商品と商品の関係」のように見えるのも、まさに貨幣形態での価値表現において初めてなのである。

単純な価値形態での価値表現が、なぜ現実の価値表現、価格表示においてはこのように変化するのか、なぜ貨幣である金商品の使用価値にたいする欲望が捨象された価値表現になるのか、を解明するのが価値形態論の課題にほかならない。最初から単純な価値形態において、等価商品の使用価値への欲望は捨象された「商品と商品の関係」と考えるなら、この課題は意識されないし、解くこともできないのである。

貨幣論において、商品価値の尺度（価値の実現）が、価格変動の帰着点をもってなされることを明らかにしたのは、宇野原論の功績であるが、価値形態論の価値表現の解明にはまだ不十分なところを残している。

参考文献

リカード『経済学原理』（岩波文庫）。

ベイリー『リカード価値論の批判』、1942年（日本評論社）。
マルクス『経済学批判』、マルクス・エンゲルス全集13（大月書店）。
マルクス『剰余価値学説史』Ⅲ、マルクス・エンゲルス全集26Ⅲ。
マルクス『資本論第一巻初版』、国民文庫。
マルクス『資本論』第一巻、マルクス・エンゲルス全集23a(大月書店)。
宇野・久留間編『資本論研究』（至誠堂）。
宇野弘蔵『経済原論』、宇野弘蔵著作集第一巻（岩波書店）。
久留間鮫造『価値形態論と交換過程論』（岩波書店）。
永谷 清『価値論の新地平』、有斐閣、1981年。
永谷 清『市場経済という妖怪』（社会評論社、2013年）。
永谷 清『資本主義とは何か—原理論』（DTP出版、2004年）。
永谷 清『労働価値説から価値法則へ』（御茶の水書房、2001年）。
Nagatani, Kiyoshi, 2004, 'Capitalist Exploitation and the Law of Value',
Science and Society vol.68, no.1.
Nagatani, Kiyoshi, 2017, 'Value-form and the Mystery of money' (not yet
published).